

彌陀本生説話の成立について

香 川 孝 雄

一 阿彌陀佛の起源に關しては、十九世紀の後半から東西學者の間によつて様々な議論が交わされて未だ定説を見ないようである。最近、藤田宏達氏によつてこの問題が再び取り擧げられて新しい觀點から再検討がなされているが、この問題に關連して阿彌陀佛本生説話の成立を考えて見たいと思ふのである。勿論、阿彌陀佛の信仰が起つてその後、彌陀本生譚が加えられたものであらうが、阿彌陀佛信仰の流れを見極める一環として是非、その間の事情が明らかにせられねばない。

本生譚の成立は阿育王の直後、即ち西紀前三世紀の終頃より流行を見たということが今日彫刻として残っている遺品の研究によつて確かめられている。それらの物語は釋尊の人格を崇拜するあまり、超人的に神話化せられ、當時インド一般に信ぜられていた輪廻や業の思想と結びついて佛陀の如き偉大な人物は必ずや前世にそれ相應の功德や善業を積んで居られるに違ひないところから、宗教的、道德的な前世物語

が形成せられた。又、一方一般信者に對しても、かゝる物語は今世に不幸な境遇にある人々にも今世の善業の功德によつて、必ず來世には善い結果が得られるであらうという期待を持たせ、努力、精進の道を平易に教えたものであらう。その爲に強いて釋尊の前生を象や鹿の如き動物としてあらわしている場合の多いのもそのことを強調せんが爲で、動物ですら善業によつて釋尊のような人格になり得る可能性を示したということが出来る。このような本生譚は最初は釋迦佛に限られていたが、次第に高德な佛弟子の前世物語にも及んでアパダーナ文學を形成し、又、佛陀觀の發達に伴つて過去佛、現在十方佛、未來佛の本生譚を成立せしめることゝなつた。

二 阿彌陀佛の本生譚は色々な經典に、そして色々な型式で説かれていて實に雑多である。従つて、この中でオリヂナルなものを見付けその生長の過程を見付け出すことは非常に困難なことである。この問題については既に、矢吹慶輝博士の「阿彌陀佛の研究」や望月信亨博士の「淨土教の研究」の

中「諸經に顯はれたる彌陀本生譚」において夫々一應資料の整理は終つてゐるが、それ以上にあまり検討が加えられていないので、各種經典に説かれる彌陀本生説話の成立について考察しようと思う。阿彌陀佛の本生説話は、現存の資料で知られる限りでは少くとも十八種類に及んでゐるが、その中で代表的なのは無量壽經類の法藏説話である。今、魏譯無量壽經により大要を示すと次の如くである。

過去久遠の昔に錠光如來あり、その佛より後五十三佛を経て世自在王佛が出世し、その時に一國王があつた。佛の説法を聞いて心に悦びを感じ、無上正眞道意を發して國を棄て王位を捐て、沙門となり、法藏と號した。彼は世自在王佛の所に詣でて諸々の生死の苦の本を抜かしめ給えと説法を請うたところ、如來は法藏の志願深廣なるを知つて諸佛國土の天人の善惡と國土の麤妙を説いた。そこで法藏は五劫思惟の後、世尊の前に詣でて四十八の本願を述べ、「若し我れ正覺を得たならば、必ずや衆生を救済するであらう。若し然らざれば我れは正覺を取らない」と誓つてゐる。そして佛が阿難に告ぐるに「法藏菩薩は今已に成佛して現に之を去ること十萬億土の西方安樂國にあつて説法し給う。そして成佛以來十劫を経てゐる」と説かれてゐる。

異譯本は多少の相違のあることは周知のことである。

さて今の法藏説話は他經に説かれる阿彌陀佛の本生説話と

比較してどの様な關連があるであらうか。前述の通り、この比較のみではその發展生成の跡をたどることは難しいがいづらかの興味のある事實は指適出来るかと思う。

三(1) 釋迦佛の本生譚が人間に限らず、色々な動物に及んでいたのに反し、阿彌陀佛の場合は、その前生が必ず人間であり、それも國王とか王子、或は出家沙門に限られていて、いづれも一般の人々から尊ばれる身分の人物として説かれてゐる。このことは必ずしも彌陀本生に限つたことでなく、大乘經典にあつては釋迦の前生もこの傾向を示し、阿閼、彌勒等の他の諸佛の前生もやはり、國王とか比丘として語られてゐるから廣く大乘佛教の問題とせねばならないであらうが、佛の本生を國王とか出家比丘とすることは、本生譚成立當初の意圖とは大分に異り、釋尊入滅より、時代が隔るにつれて佛を益々超人化し、理想化する一つのあらわれ方を示しているものと考えられる。初期の本生譚では釋迦佛は前世では我々と同じ凡夫の身であり、更にもつと低い鳥獸類ですらあつた。しかしそのような身であつても善業功德によつて佛となることが示されている。即ちすべての有情は誰でも成佛出来る可能性を示しているのであるが、阿彌陀佛も含めて大乘佛教の場合は既に前世において世間的には實力あり高貴な國王であり王子であり、又、出世間的には一般信者より崇められる出家比丘であつたとされることは、自らが佛となることよ

りも、寧ろ救世主たる佛は我々と同様の身ではなく、元來より高い人格であり、そのような超人的人格によつて救われたという淨土教的他力觀念を抱いた一般在家信者達の願ひではなかつたかと憶測するのである。又、佛の前生を國王とか王子とすることは、王權の強い地域社會にこのような思想が育まれたということが出来ないであらうか。彌陀本生譚を語る無量壽經の成立については、經典自體の發展の過程もあるから一概に云うことは出来ないが、凡そ西紀後一、二世紀頃、クシャーナ王朝の統治下で成立したと考えられるから、そのことゝ關連して考えられる。

(2) 本生名と身分とは經典によつて種々雜多である。唯だ無量壽經類、觀無量壽經、智度論が法藏と述べる外、S本、T本の法華經普門品の偈に *Dharmakara bhikṣu* と呼びその師佛を *Lokēśvaraia* とすることが注目される。但しその箇所は漢譯本にはいづれも缺けるところであり、同經の化城喻品にある説話とも矛盾しているから後世の添加であるかとも考えられるが、系統を異にする經典でこの様に一致を見ることは他に例のないことであり、凡らく後世彌陀信仰の影響で附加せられたのであらう。この様に彌陀本生説話は各種經典に多く語られているが、阿彌陀佛を本尊とする經典では所謂法藏説話に一致しているに對し、他は全く種々雜多で各經典が各々獨自の本生譚を語つていたのである。

彌陀本生説話の成立について（香川）

(3) 無量壽經類のみで見ると、大阿彌陀經、平等覺經、無量壽經の三譯は本生の身分が最初は國王であつて、後に出家して沙門となつたと説くのであるが、それ以後の譯は、國王であつたことを抹消してしまつてゐる。國王が出家して沙門となつた例は慧印三昧經とその異譯に見られるだけで他には例がない。又、最初の三譯が定光佛↓世自在王佛の順であるに反し如來會以後になればその順序が逆に世自在王佛↓定光佛と全く轉換してしまつてゐる。このようなことは慧印三昧經に定光佛↓慧上とあるのが劉宋失譯の如來智印經では慧起↓定光の順となつてゐる。しかし宋代の譯たる智吉祥の大乗智印經では再び慧印三昧經の順に復してゐるのである。又、無量門微密持經では燃燈佛は彌陀の本生たる無念德首太子を師としたと説かれて燃燈佛が後になつてゐる。この過去佛の順序については泉芳璟教授が詳しく論ぜられたことがあるが、このいづれが正しいかは別として原典に既にこの相違があつたのではなからうか。無量壽經類では奇しくも國王沙門とする大阿、平等覺、無量壽の三經は共に定光↓世自在王の順であるに反し、國王であつたことを抹消する他の諸本が悉く世自在王↓定光の順としてゐることは、兩者の間に彌陀本生説話の生長の過程に一つの斷層を有することゝなる。

(4) 無量壽經の翻譯者については、はつきりしないものが多いが、彌陀本生説話を含む經典の翻譯者を見ると、支謙、竺

法護が壓制的に多い。勿論、初期の中國佛教で彼等の印した活躍の大なることにもよるのであるが、一般に中國初期の大乗佛教の主流は月支佛教であつたと云われる。今の二人は月支族の血統は引いているが月支の故國より來支した人ではなく、又、竺法護の時代には月支族の建てたクシャーナ王朝はササーン王朝によつて滅された後である。しかし、竺法護が三種の彌陀本生説話を語る賢劫經の原本を罽賓の沙門から得たと云う記録によつて、嘗つてクシャーナ王朝の榮えた罽賓佛教とは連絡のあることがわかる。従つて彌陀本生説話の成立についてはクシャーナ王朝下の西北インドの佛教は勿論のこと、その傳承についてはクシャーナ王朝崩壞後のイラン文化圏下の佛教が考慮に入れられなければならない。

(5) 更に興味深いことは、支謙譯と稱する經典のすべてが燃燈佛との關連において説かれてゐることである。この中には大阿彌陀經のように支謙譯を疑われるものもあるから支謙譯と決めるわけではないが、彌陀本生説話の中には燃燈佛とのかゝわりを持つものが多い。例えば阿彌陀佛の師佛より何代目の佛であつたというように直接に關係はなくとも間接に何らかの形で燃燈佛が登場する。そうすると阿彌陀佛の信仰圏と燃燈佛の信仰圏が地理的に非常に近い、或は重つた地域において彌陀本生説話が誕生したのでないかと考えられる。若しこの考えが許されるならば、燃燈佛の思想の盛んな地域

を見出すことによつて、彌陀本生説話の成立地域を推定することが出来る。

法顯の佛國記や玄奘の大唐西域記では那揭羅曷國を燃燈佛本生の傳説の地としてあげてゐる。これらの傳える傳説は四分律や增一阿含經等に説くところで「珍寶仙人の弟子、彌却が五百金錢を以つて買つた七つの蓮華を燃燈佛に供養せんとして投げたところ、佛の威神によつて空中にとゞまり花蓋となつた。そこで鹿皮の衣を脱いで地に敷いたが泥を掩わないので髻髪を解いて泥上に布き、『若し我に記を授けられなければ此處で命終して再び起たないであらう』と云つたのに對し、燃燈佛は彼の善根具足せるを知つてその髪を蹈んで過ぎ記を授けられた。その時の彌却は釋尊であつた」とする有名な物語である。この傳説を支持するかの如く、ナガラハラの西北約百軒のショトラクより發見されたカール博物館藏の焰肩佛形式の燃燈佛は明らかに右の説話を表現した彫刻である。その他、この説話を題材とした彫刻はこの地方から數種發見せられてゐる。このように、同じ燃燈佛授記の説話を主題とする彫刻がガンダーラの西方から發見され、それが又、入竺求法僧達の記録にもあることは、この邊一帯に燃燈佛の思想が盛んに流行していたことを證するものである。加うるにその中の一つではあるが焰肩佛の形式を具えてゐるものがあつて注目される。焰肩佛はベグラムのすぐ南六軒のバ

イタバやカーブルからも發見されており、更に中央アジア干闥のラワク寺の遺跡からも發見せられて後に中國における火焰光背の形式を作り出す基となつたものとせられるが、既に千渴龍祥、春日井眞也兩博士によつて考證せられた通り、阿彌陀經の六方段に出る焰肩佛を想起するとき、淨土教思想とも深いつながりをおわせるものがある。そのような意味からも阿彌陀佛信仰と燃燈佛思想が何らかの關係を有するよう考えられる。しかし乍ら阿彌陀佛信仰にとつて燃燈佛がなくてはならない程、重要でもなく、又、燃燈佛なしでも阿彌陀佛信仰が成り立つことは云うまでもない。

四 次に燃燈佛を説く部派はどの部派においてあつたかと云うことを調査して部派佛教との關係及びその地域を考えて見たい。赤沼智善教授の研究によれば「燃燈佛の思想は部派分裂以前のものと、部派の共通財産の一つであるが、阿育王以前の發生ではなく、阿育王以後、部派分裂迄の發生である」とされる。従つて燃燈佛の語はあちこちに出て來るのであるが纏つて出て來るのは説出世部のマハーパストのみである。しかしこれと同じく纏つたものがあつたと考えられる記事として有部の婆沙論に「燃燈佛本事」といふ、法藏部の佛本行集經に「如上因緣然燈菩薩本行經説」とあることによつて、これらの部派の間でもそのような信仰が傳承せられていたことが知られる。中でも法藏部は四分律に燃燈佛の説話

を説いていることは先に述べた通りであるが、他の律典には全然觸れるところがない。そうすると燃燈佛の思想は各部派共通の思想であり、又、大乘經典の中にも多く出ているとは云え燃燈佛を主題として説く説出世部、有部、法藏部等の部派は少くとも他の部派より燃燈佛についての思想が濃厚に傳承せられていると見なければならぬ。説出世部の流布していたのは玄奘の言によれば、パーミヤンを擧げ、又、有部はインドの西北境近くを基盤として榮えた部派であり、法藏部は玄奘、によればインド本土では行われたことを述べず、唯、ウディヤーナのみを擧げるのである。かくて燃燈佛説話を傳承した地域がインドの西北境、ガンダーラ周邊よりカーブル、パーミヤンを結ぶ西方からの交通路に沿つて盛んであつたと考えられるのである。

五 以上主として法藏説話の成立について考察したのであるが、これらのことを綜合して見ても、ガンダーラ近邊の地域においてクシャーナ王朝治下に彌陀本生説話の成立したことが推定される。その邊は西方との交通路に沿つていたため、西方思想からの影響、更には永らくその地域に住したサカ族との關係についても考えなければならぬであらうが、今はこの課題を解決するためのステップとしてその一端を述べたのである。

1 藤田宏達「阿彌陀佛の原語」印佛研第十三卷第二號、同氏

彌陀本生説話の成立について(香川)

一六〇

「阿彌陀佛の起源問題」宗教研究第一八二、一八三號

- 2 千渴龍祥「本生經類の思想的的研究」pp. 13-17 阿育王時代か或は其の直後位かと思われる Satchi 第二塔の欄楯には本生談を表わした彫刻は見當らないがその直後の大凡西紀前三世紀終りから二世紀中のものと思われる Bharhut 塔の欄楯にはかなり多くの本生談を表わした浮彫があるとされる。

- 3 無量壽經の成立について近くは昭和三十九年度本學會の學術大會が大谷大學で開催された時、大谷學會の公開講演會で發表された中村元博士「淨土教の世界思想的意義」がある。その要旨は大谷學報第四十四卷第一號に收められているが、無量壽經の成立を華嚴經との親近性より論じ華嚴經がコータン文化と印度佛教との交流地點で成立したとされ、その年代を西紀後二世紀頃と推定されている。

- 4 H. Kern and B. Nanjio; The Saddharma-pundarika sūtra p. 454

- 5 泉芳璟「梵文無量壽經の研究」の中、「世自在王佛は燃燈佛より前か後か」ここは parena の意義用法を問題とされ、「次前」の意に取るべきことを主張された。

- 6 竺法護譯、賢劫經の奥書「永康元年七月二十一日月支菩薩竺法護從罽賓沙門得是賢劫三昧」(大正一四、六五、c)
- 7 法顯、高僧法顯傳(大正五一、八五八c)從此北行一由延到那竭國城是菩薩本以銀錢買五莖華供養定光佛處

- 8 玄奘、大唐西域記二(大正五一、八七八c)(那揭羅曷國の條)釋迦菩薩值然燈佛、敷鹿皮衣布髮掩泥得受記處

- 9 那揭羅曷國とは Nagarahara を指し、ガンダーラとカピシヤの中間地點で現在の Jelalabad の近く。

- 10 四分律三一(大正二二、七八四a—七八五c)増一阿含經一一(大正二、五九七a—五九九c)

- 修行本起經上(大正三、四六二a)過去現在因果經一(大正三、六二一c—六二二c)

- 佛本行集經三(大正三、六六四b)大智度論七四(大正二五、五七九c)

- 11 ガンダーラ地方の Sikri の塔、Yasut'ai, Nathu 等からも燃燈佛授記の彫刻が発見されている。

- 12 龍谷大學、西域文化研究會編「西域文化研究」五、九一頁千渴龍祥「阿彌陀經の焰肩佛について」(山口博士還曆記念「印度學佛教學論叢」所收)

- 13 春日井眞也・藤堂恭俊「淨土經典の形成」(宮本正尊編「佛教の根本眞理」所收)

- 14 赤沼智善「燃燈佛の研究」(「原始佛教の研究」所收) Mahāvastu. I. p. 193

- 15 婆沙論一八三(大正二七、九一六b)佛本行集經三(大正三、六六四b)

- 16 玄奘、大唐西域記一(大正五一、八七三b)右三(大正五一、八八二b)